



四国ディスカバリー

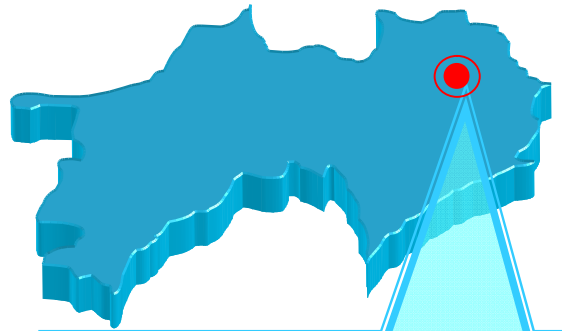
～洋ランの総合産業化(6次産業化)に取り組む会社にお話を伺いました～

～目指せ 洋ランでふる里創生～

一目みると、心が奪われてしまうような美しさ。花もちが非常によいことから贈り物としてプレゼントするととっても喜ばれる。そんなシンビジウム（洋ランの一種）の品種改良や生産販売などを行っている「河野メリクロン」をご紹介します。

「河野メリクロン」が品種開発したシンビジウムは10年に一度開かれる世界最大級の国際園芸博覧会（フロリアード）で、2002年には最高賞を受賞し、出展した16品種がすべて金賞を受賞しました。また、2012年には、シンビジウム「親王」が春・夏・秋の全会期を通じ世界42カ国から出品された1779品種の花々のなかで、10点満点中9.90という最高得点を獲得するなど、世界的にも高い評価を受けています。（実際に店頭で販売されているシンビジウムを見させていただきましたが、ほんとうにきれいで、美しく、見とれてしまいました！）

そんな「河野メリクロン」の創業秘話や今後の事業展望などを常務の河野圭佑さんにお聞きしてきました。



名 称 株式会社 河野メリクロン
所在地 徳島県美馬市脇町大字北庄 562 番地の1
設 立 1977年（昭和52年）
代表者 河野 通郎
従業員 約120名（グループ合計）
資本金 21百万円
HP <https://www.kawano-mericlone.com/>

●社長のランへの熱い思いがあって、「河野メリクロン」を創業したと聞いていますが、社長がランに興味を持つようになったきっかけについてお聞かせください。



ヒアリングの様子（左奥：河野圭佑 常務）

現社長である河野通郎が創業したのですが、社長が高校2年生の頃に一冊の園芸書でランを見て興味を持ったのがきっかけです。当時、ランはとても高価な花だったため、花を簡単に見ることさえできなかったそうです。そのため、モノクロ写真や園芸書に文書で書かれているランの価値や美しさに、より想像をかき立てられたと。以来、ランの持つ魅力に取り憑かれ、命も青春もすべてをランに捧げようと決意したと聞いています。

●創業時に苦労したことについてお聞かせください。

会社名にもなっているメリクロン技術（従来の方法より容易に苗の繁殖ができる技術。）ですが、この技術が実用化されたことで、いろんな品種と交配させることが容易になり、シンビジウム「あんみつ姫」「マリーローランサン」など新品种がどんどん生み出されるようになりました。しかし、メリクロン技術が発表された当時、日本においては、知識も文献も少なく、独自のメリクロン技術を確立するしかありませんでした。そこで実用化技術にするために、独自の研究をしましたが、その際には、クリーンルームのように無菌状態の空間で研究をする必要があり、物置にトタンで密室を作ったそうですが、夏は暑くて大変だったと…。防弾チョッキのようなものにドライアイスを入れて密室に入り、息が出来なくなって死にそうな思いをしたこともあったと聞いています。



人気品種「あんみつ姫」

●新品种づくりについてお聞かせください。

新品种づくりは、二つの品種を親とし、子の品種を作るのですが、種が出来るまでに1年弱、発芽して花が咲くまでに3、4年かかります。そしてその花が良いか悪いかの特性の調査と並行してクローン苗づくりに1年ほど、それから一人前の花が咲くまで3年ほど、という具合でトータル約10年かかってしまいます。また10年経っても、その花は人間に例えると大学を卒業したくらいで、品種として世間に評価されるかはわからない。そのような作業なんです。

その中で作られた人気品種は、フロリアード2002、2012で世界的にも高い評価を受けており、また、国際報道写真家の平島祥男氏とのご縁もあり、天皇皇后両陛下に献上させていただいております。

●「河野メリクロン」といえば、薬用育毛剤「蘭夢^{らんむ}」で有名ですが、なぜシンビジウムを使った商品の開発をしようと思われたのでしょうか。

もともと社長自身、「花は目で見て楽しむもの」という考えだったので、日本人の感性に合う新品种づくりとクローンによる種苗生産には取り組んでいましたが、シンビジウムを原料にした商品を作るというのは、まったく考えていなかったみたいです。

そんな中、哲学博士の山下一郎氏にお会いする機会がありまして、おみやげに「マリーローランサン」の花を一鉢差し上げたんですね。すると、数日後に手紙をいただきまして、「この花には人々を幸せにするすばらしいエネルギーがあります」と。社長もその言葉でシンビジウムの新たな可能性を感じる



シンビジウムを使った商品の一例（左：お茶、右：薬用育毛剤）

ようになって、徳島文理大学薬学部名誉教授である橋本敏弘氏に「マリーローランサン」が持つ生命力に着目した研究を依頼するに至りました。すると研究の中で新規化合物がどんどん発見されてきて、そしてそれを応用して育毛剤、ワイン、石鹸などが作られるようになったというわけです。

実は、「あんみつ館」で売っているもの以外にもたくさん開発しているんですが、そのアイデアってというのは、社長の頭の中であって、こういう商品を作れないかという社長の直感や思いを基に、新しいものが生まれています。

●新品種づくり中心から、シンビジウムを原料にした商品開発も行うようになったということです
が、社員の方からの反応等はいかがでしたか。

商品については、当社でシンビジウムエキスを作成し、それを化粧品会社等に供給して製造を行っているのですが、当時はエキスの作成方法さえわかっていませんでしたし、社員も「花は観賞用」という認識だったため、正直、「シンビジウムを原料にした商品の開発なんて本当に可能なのか」という意見もあったみたいです。ただ、社長の中では売れるかは分からないけれど、山下氏や橋本氏のお言葉もあったので、良いものができる確たる自信があったんだと思います。それでいろんな方々からご教授いただきまして、エキスも作れるようになり、「蘭夢」をはじめ、様々な商品を生み出すことができました。特に「蘭夢」は、今ではすっかり当社の主力商品となっています。

●地方創生への取り組み状況についてお聞かせください。

観光の方で美馬市と連携しています。1991年に「あんみつ館」、2009年には「蘭夢美術館」をオープンし、近くには徳島自動車道の脇町インターチェンジがありますので、今ではうだつの町並みとならんで、市の玄関的な観光施設となりました。特に「あんみつ館」は地域の観光施設としてだけでなく、人々の出会いや交流の場として、新品種の発表やアンテナショップの代わりなど、いろんな役目を果たせるような施設になっていると思います。

また、訪日外国人の受け入れにつきましては、中には言語への不安を抱えるスタッフもいますが、「ランに興味をもって立ち寄ってくれる方がいるのに、その機会を無駄にするのはもったいない!」という話をしていきまして、改善していこうとしているところです。



蘭夢美術館

●今後の課題や事業展望等についてお聞かせください。

現在、コールセンタースタッフは全員「毛髪診断士」の資格を持っています。お客様から問い合わせをいただいた際には、スタッフそれぞれが適切なアドバイスができるように、専門的な知識を身に着けるための研修やセミナー等に力を入れており、今後もスタッフの能力向上に努めていきたいです。また現在、住環境の変化等で生花の販売状況は厳しいものとなっています。そのため、国内市場を維持しつつも、シンビジウム「マリーローランサン」を原料とした商品の海外展開についても模索しているところです。

最後に花は平和の象徴です。ランの花を通じて世界の人々と仲良くし、少しでも世界の平和に役立てばと願っています。

<取材後記>

人気品種づくり、シンビジウムを原料にした商品開発、販売までを一貫して手掛けるなど、「河野メリクロン」がランの6次産業化に成功した秘訣は、社長がランと出会ってから約50年間、ラン一筋で人生のすべてを捧げてきたという、社長の熱い思いがあったからこそ。そして、「朝目覚めてから夜寝るまで、365日24時間ランのことを考えるようにしています」その言葉を聞いて、この熱い思いが、常務にも受け継がれていると感じました。また、常務の気さくで温かな人柄は社員や地域住民にとって、話しやすく、頼りやすいんだろうと、今回、お話を聞かせていただいた際に強く思いました。

「あんみつ館」をはじめ、藤島先生（美馬市出身）の絵画等が展示されている「蘭夢美術館」や色とりどりのランが並ぶ「お蘭見広場」など観光施設も盛りだくさんであることから、美馬市を代表する観光施設としても、今後の盛りあがり期待されます。

※「お蘭見広場」には、今流行りのインスタ映えスポットもありました。定位置から撮影すると、並んだシンビジウムがハート形に映るとのこと…。わたしたちも記念に一枚パシャリ。気になる人は、是非足を運んでみてください。

（徳島財務事務所 財務課 元木 里渚、管財課 池澤 貴之 ）

掲載している情報は、平成30年2月時点のものです。

掲載している写真の一部は、同社よりご提供いただきました。